



## 敗戦80年・「阪神淡路大震災」後14年 「福島原発震災」後30年・

天野 恵一

手立てをもつていなかつたことだらう。」

9月20日に、小田実没後18年シンポジウム

ム「人間の国」はどこに? 戦後80年目の現実・世界を覆う不穏な空気の中で考

える」) という集会が開催され(主催・小

田実文学と市民運動を考える会)、私たちの会

も、これに全面的に協力した(この集まりの

報告は、本号に収められている)。すでに小田

の『被災の思想 難死の思想』(朝日新聞社・

1996年3月)を今年に入つてすぐ読み直

していた私は、戦後20年の年(1965年)に『展望』(1月号)に書かれた「難死の思想』の方を久々に読み直して、この集まりに参加した。

「難死」、この小田がつくりだした独特の言葉について、彼は、そこで、以下のとおり説明を与えている。

敗戦が決まつた時間、まだ子供であった小田には、国が公的に戦争(とその死)を美化し正当化する理念、例えば「散華」、「総力戦の理論」、「近代の超克」などはなかつた。あつたのは、西欧をやつつけようとい

う、お粗末な「大東亜共栄圏の理想」と「天皇陛下のために死のう」の二つぐらいのものであつた、と語りつつ、彼はこう続ける。

「そして、私にとつて、死とは——映

画で見たり新聞で読んだりしたものではなくて、本当に自分の眼でおびただしく見た死は——決して特攻隊員の死のよう

に、たとえば『散華』という名で呼ばれる

ような美しいものでも立派なものでもなかつた。また、彼らの死のように『公

状況』にとつて有意義な死でもなかつた。

私が見たのは無意味な死だつた。その『公状況』のためには何の役にも立つていなかつた。ただもう死にたくない死にたくないと逃げまわつてゐるうちに黒焦げになつてしまつた、いわば、虫ケラどもの死であつた。その虫ケラどもは武器をもつてゐなかつた。ということは、特攻隊員のよう、戦場の勇士のように自らの死を

敗戦から50年の1995年1月17日未明の「阪神淡路大震災」の被災者となつた小田は、まだ地中に多くの人が埋まつてゐる状況下で、そういう事態をもたらしたその責任を問うこともせず、人命救助より「復興」のスローガンの下、またもやビジネス最優先の政治家・財界人・知識人(有識者・学者)・マスコミの大連合に向かつて「被災者」というポジションから激しい怒りの

声（具体的批判）を發し続けた。その持続的怒りの言葉の集積が『被災の思想 難死の思想』である。「人間はこのようなかたちで殺されてはならない」という強烈な思いとともに、ここで「難死」の体験は「被災」の体験と歴史的に重ねられている。この時、小田は憲法九条の絶対的平和主義の精神のかけがえのない大切さを再発見している。

私たちは、2011年3月11日に、千葉に住んでいた私たちをも被災者にする（福島原発震災）を体験することになった。戦後80年の今年は、その被災後14年である。〈3・11災後〉14年は、敗戦80年の時間と「阪神淡路大震災」後30年の時間と重ねて、考えられなければならない。

〈原発ゼロ〉という、そのあまりにも悲惨で、終わりが見えない体験をテコに、やつと広く共有された、あたりまえの意思を、いたるところで打ち碎こうとという政府・財界・マスコミの一体化した攻撃は、今まさに強化されている。

〈敗戦後〉80年の時間と二つの〈被災の体験〉とその後の時間とを重ねて、現在を批判的に検証する。今年の本誌は、ほぼ、こういう問題意識で編集された。本号は、そのシメのつもりで編集した。

（あまの・やすかず／本誌編集委員）



書：山村雅治  
「小田実没後18年シンポジウム」パンフレットより